美紗の会 たより

逢うは別れ

西松　布咏

逢うは別れの始め・・・とは中国の詩人白楽天の言葉であるが今年は殊更身に沁みた。三味線のお稽出逢いの糸が結ばれてゆく喜びを感じながら差し向かいの稽古の日々を送っているが、この歳になると時折、別れの覚悟をしなければと想うことがある。覚悟と言えば文字通り悟りを自覚する事だが未だにそれが出来ず、事ある度にふがいない自分に愛想尽かしをしている。でも私は三味線に出逢ってしまったのだから別れの時が来るまで未熟な自分と付き合わねばの想いでこれまで生きて来た。

このような私をいつもそばで見守ってくれていたのが美紗の会会長のまま四月二十八日に逝去した大久保朋子さんだった。

彼女は聡明だが人一倍の負けん気で人知れずの努力家だったが、いつも笑顔を絶やさず語る言葉はそよ風のように柔らかだった。でも私には時折「貴女は無防備だから心配だわ。一生懸命なのにどこか抜けちゃうのよね。」と女学校の同級生だったのに姉目線でやんわりと諭してくれた。

癌が肺に転移しても彼女から出稽古を申し出て、武蔵小金井の自宅で差し向かいの時を持ち続けてくれた彼女の慈愛と意志の強さは永遠に私の心に生き続けてゆくと感謝している。

くしくも五十四回目の「美紗の会のつどい」は月命日の十月二十八日だった。二部は舞台に写真家のご主人が撮られた笑顔の写真を掲げ、会の最後に私の演奏する「寝られもやらぬ秋の幾夜さは　忘れもやらぬさび鮎の味」の曲で集った方々と共に故人を偲んだ。

もう一つ「逢うは別れの」と言えば十月二十、二十一日に開催した「アジール」の中に登場した駒姫である。

二〇一五年の春、京都の高瀬川の流れのままに三条大橋を散歩していると豊臣秀次所縁の「瑞泉寺」にたどりついた。墓の近くに秀吉に謀反の疑いをかけられ切腹して果てた秀次の三十数名の一族とともに処刑された女達の辞世の句が整然と安置されているのを観た。この時の衝撃はたとえようもなく、どうしてもこの数奇な運命に散った女性を唄ってみたいと飯名尚人氏に相談した。飯名氏も同じ想いだったがあまりにも惨い悲劇をどのような手段で演出したらよいか・・・の困難は眼に見えていたので半ばあきらめていた。だが二〇一六年の夏も終わる頃、数年来続けていた「アジール」に駒姫のエピソードとして登場させたいとの連絡があり、ようやく世田谷龍雲寺での五回目の「アジール」が実現したのである。

二〇一一年に京都永運院から始まった「アジール」で、遊女でありながら自らの運命を覚悟し隅田川に沈んだ高尾太夫を「逃げない女」としたが、秀次に見初められ輿入れする為に出羽の国から上洛した十五歳の美少女を「逃げられない女」と表現した。中

前川充

飯名尚人

西レモンが秀吉所縁の刀と称した偽物を掴まされた男を登場させ重苦しい場面をコミカルな講談で終えた後、赦免の命が下るも間に合わずむなしく最後に処刑される駒姫の辞世の句を鈴の音にのせて唄うべく毎日その句が脳裏から離れなかった。

「罪をきる弥陀の剣にかかる身の何か五つの障りあるべき」

秀次に逢うたばかりに心ならずも罪なき身をひとたちの刃でこの世の別れを余儀なくされた駒姫の運命を我が身に置き換えてみてもどうにも唄にならず苦渋しながらむなしく時が過ぎていった。

ついに舞台にあがる前日、駒姫の無念の涙を無我の境地で祈るように唄うことにした。それは私なりの覚悟であった。

二〇一五年　すでに閉店した「福田家」での演奏を迎えた七月七日声帯を冒されどうしても声が出ない自分と向き合い、まさに切腹する心境で臨んだ覚悟のときが心によぎった。

これからも縁の糸を大切に紡ぎながら、逢うは別れの運命が尽きるまで唱うように無心で唄い続けてゆきたいと切に想ふ。

会長就任のご挨拶に代えて
―一九九四年へ

己紗　佳咏

そもそも。LAに嫁いだ妹に会いに定期的に渡米している頃、知人のデザイナーから「サンタフェに暮らす身内がネイティブアメリカンの子どもたちの絵画展を東京で開催したいらしい、見に行ってほしい」と懇願された。仕事で訪れたインドで親しくなったチベット僧侶と交流が始まった頃で、LAからアリゾナ～サンタフェへ旅のバッグにはそんな関連の本をごっそっと入れていた。

プエブロインディアンの有名な住居、オールドアパートメントの後ろに聖なる山がそびえる。彼らの魂はその頂にある湖で生まれたという。案内人が、数日前にチベット仏教の最高指導者がこの地を訪れ、彼には以前からその湖が見えていたんだと教えてくれた。幸せな偶然、ショルダーバッグに入れていた本を外からぽんと叩いて、「虹がつながった」とつぶやいた。

帰国後半年ほどの準備期間を経て、子ども絵画展とフォーラムを東京で開催した。フォーラムではプエブロインディアンの文化人類学者と中沢新一さんの対話を企画。アーティストの日比野克彦さんには子どもたちと絵のワークショップを公開で実施していただき、ステージの照明デザインを光栄にも藤本晴美さんにお願いすることができた。私自身もそうだが、全員がボランティア、何とも幸福なイベントになった。そしてそれから半月後、松岡正剛さん監修の『平安遷都一二〇〇年記念フォーラム』の舞台照明を藤本さんが担当されると知り、感謝の気持ちをお伝えしようと京都行きを決めたのだった。

そもそも、である。京都に行かなければ、そのまま福岡まで足を延ばすことはなかった。『日本文化デザイン会議・福岡』では、日比野さんや松岡さんが講座を持たれる。こうなれば参加するのが自然の成り行き。そして一九九四年十月、福岡で、松岡さんが企画されたワークショップで、私は西松布咏に出会った。黒い着物で目をつむり唄われた『黒髪』が身体の中にずしんと入り込んでいく感覚を思い出す。また夜の宴席で聴いた『やっこさん』に激しく恋をした。その一週間後に入門させていただいたのである。この話は続きがある。入門の数日後、松岡さん主催の『オペラ学会』での演奏をタイミング良くご案内いただき、師匠の背後のスクリーンで音にリンクし動く黒く美しいキューブとも衝撃的な出会いとなった。世界のインタラクティブデザイン作品のオリジン、NY近代美術館にデザイン史の重要な足跡として展示されているジョン前田の『リアクティブ・スクエア』で、彼はその後、私の仕事のキャリアに大きな影響を与え無二の親友になった。

美紗の会のみなさまそれぞれに、そもそもがある。江戸からのつながりを持つ人もいるだろう。名取り名の『己紗』に、布咏師匠はその人らしい糸という意味を込められた。だからこそ、お一人お一人が自由にのびやかに時間をかけて演奏が成熟されていくのを見守るような会であってほしい。会長は重責で、その器ではないが、やわらかいお考えの師匠のお手伝いをさせていただきたいと思っている。その人その人であることに寛容な心地良さを大事にしていただきたいとあらためてお願い申し上げたく、会長就任のご挨拶に代えて、私自身のつたない話を書かせていただいた。

「美紗の会のつどい」気分よく

海上　雅臣

十月二十八日赤坂クラブでひらかれた『美紗の会のつどい』に西松布咏師匠について三味線を習いはじめた娘の芽女に誘われて出かけた。久しぶりに、本当に久しぶりに和風の音色と装いに満ちた坐につらなり気分よい思いにひたった。

私の書斎の短冊掛けに、谷崎潤一郎が、一字一字慎妙に書かれた和歌の短冊がかけてある。散らばれる原稿用紙に音立てて畳の上を秋の風吹く

潤一郎

さすが文豪、書きつぶし書きつがれた原稿用紙の反故が机辺に放り出されているのであろう。たまさかに、かかる小文を記そうとして、おづおづとその日の印象を思い出そうとするような身は、この短冊に眼をやるたびに身のすくむような思いがする。

ちなみに、この短冊は書かれた時、同席の棟方志功が、望みの歌を書いて頂き、ご署名を谷崎潤一郎として下さいと望んだのに、微笑もされず、姓は書かずに渡された。古風の習慣に従って居られたのだ。

美紗の会に坐していて、設けられた高座につぎつぎ上がられる紳士淑女諸氏がよそおいをつつましく構え、畳の上ゆく秋風のようにやさしい声を上げられるのを、陣頭に坐し指図される面持ちの御師匠さまの、凛然とした面持ちをひそかに懐かしい思いで仰ぎみていたことを思い出す。

短冊につましい和歌を書きとめられた谷崎さんは弟御の精二さんに学資を与えられるとき、学業の余暇に三味線を習う事を要望されたと聞いている。「陰影礼讃」の名随筆を残されている文豪は、和の風儀を大切にされていたのだ。

布咏師匠の仕草と江戸前の口ずさみに、あの日の門下の方々の、うれしげなたたずまいを思い浮かべつつ、かくも他愛ない随想を記させていただいている今をうれしく思う。

（筆者、美術評論家。棟方志功をはじめ八木一夫、井上有一。木版画、陶芸、書と、伝統のながれから現代美術の国際的な作家を推挙した業績で知られる。）

上方唄に想ふ

己紗　秋咏

ずいぶん昔、笛のカルチャーセンターに通っていたことがある。音がなんとか出るようになった頃、めりやす（明の鐘・黒髪・もみぢ葉）を教わった。そのとき、三味線も達者な稽古仲間の一人が言った。『黒髪』に始まり『黒髪』に終わるのよ」三味線に触れたこともない当時の私には、その意味するところが分かるはずもなかったが、その言葉は美しい調べとともに心に刻まれた。

それから十年以上の時を経て布咏先生に出会った。三味線の師を探していた歳の暮れ、布咏先生の熱烈なファンだったMさんに演奏会に誘われた。時間の都合がつかなかった私は一人で演奏会へ行く夫にCDを頼んだ。そして初めて布咏先生の唄を聴く。スピーカーから流れたのは地唄「ゆき」そして「黒髪」と続いた。そのときから、布咏先生と地唄（上方唄）は私の憧れとなった。年明け、私は恐る恐る布咏先生に入門したい旨のメールを送った。ちょうど十年前のことである。

十一月十一日、「上方の粋～月想ふ舞と色そゆる唄と」と名付けられた上方唄と舞の鑑賞会があった。

畳半畳で舞うという上方舞。山村若静紀さんの舞は静かで美しかった。テーマの「月」がそのまま題にも入る「弓張月」と「ゆかりの月」は今回初めて聴いた。弓のように細い月の出る暗い夜、恋しい男の元へ忍んでいく女。思いもよらぬ男に身請けされ想う人に逢えない哀しみを月影によせて嘆く女。会場『よし梅芳町亭』のある路地のそばには小さな観音様があった。かつてこの界隈に住んでいた花街の女性たちも、切ない思いを胸に秘め観音様に手を合わせたのかもしれない。そんなことを思わせる若静紀さんの舞姿だった。

そして、布咏先生の唄「ぐち」を聴いた。あのときの衝撃をどう言ったら良いのだろう。

「唄を聴くと情景が目に浮かぶ」と、よく言う。確かに私も唄を聴きながら美しい風景や女たち、或いは物語の場面を脳裏に描いてきた。だが、このと

きは違った。

ゆっくりとした唄、長く伸び揺らぐ声、弦の響き…それらが私の身体に染み入ってくると、次第に私の意識は自分の内へ内へと入っていき目の前には何も無くなった。何も見えぬ中、主人公の女の感情だけがダイレクトに激しい波動となって押し寄せる。私を捉えて放さない感情のうねり…。やがて身体の奥底に灯をともすように小さな熱い塊が生まれる。いや、眠っていた何かが呼び覚まされたような感覚とでも言おうか…。そして唄が進むにつれ、その熱さが、あたかも血液が運ばれるように身体全体に広がって行く。いつか、指先の血までが波打つのを感じていた。

初めて聴いたわけではない。軽口とも思える言い方で「ぐち」を漏らしながらも、その言葉の裏に愛しい男への熱い思いが込められた美しい上方唄。初めて聴いた布咏先生のCDにも収められている私の大好きな唄の一つだ。でも、この日の「ぐち」はこれまで聴いたどれよりも凄かった。「よし梅」という場の良さもあったのだろう。あの日、あの時間をあの場所で過ごすことのできた幸せをつくづく思う。

不条理のはざまに、女たち

ヤリタ　ミサコ

二〇一七年十月二十日、小雨まじりの曇天のもと、野沢龍禅寺は何ものにも動じないどっしりとした構えで、広い境内に入ると、俗世から切り離された静謐な空気が感じられます。ふと気が付くと、今がいつの時代なのか、ここがどこなのか、アリスのように見知らぬ空間に迷い込むような気分。庭の各所に墨でAsy－会場への案内が大胆に描かれていて、即興的に書かれた墨書が、日常の文脈からすでに逃亡しているようです。

布咏さんは江戸時代からやってきた語り部の風情。障子を背景にして、唄と三味線で聞き手を吉原の世界に連れて行ってくれます。隅田川の夜風に吹かれて乗船すると、その向こう側は、日常から切り離された世界。恋の駆け引きと揺れる女心が唄われます。「嘘とまこと」「伽羅の香り」「夢の手枕」では、身体は自由にならなくても、唄に思いを託す女たちの声が多重に聞こえてきます。男はこう思われたいと願い、女は現実の憂いを吐き出し、多数の唄い手が唄い継いできた思いの深さ。陰影のある布咏さんの高音の美しさが、江戸の吉原の夜の一場面を醸し出します。遊女たちの真実と現実の虚、この両面を行き来する揺らぎ。布咏さんの三味線と声に、酔いました。

また、布咏さんはジャズの名曲である"You, a be so nice to come home to"も、和のテイストで唄っています。二十世紀のニューヨークの女の声が禅寺の境内に舞い降りて、吉原と京の三条河原と二十一世紀の東京と月世界とを、一すじの見えない糸でつなげていくようです。

今回の公演は、逃げる女の息遣いよりも、男女のわかりあえなさよりも、運命という理不尽さが強く印象に残るステージでした。中西レモンさんによる駒姫の語りは、まるでここが三条河原になったかのように臨場感あふれ、寺田みさこさんの熱を内包し

てしなやかにしなる身体は、最後は隅田川に逆さ吊りにされた高尾太夫に見えました。前回の池上實相寺で拝見したときは、男と女の心の位相の違い、幾重にも重なりあうレイヤーのずれを感じたのですが、今回は運命とか天命とかのような、人間がどれだけ抵抗しても超えられない何か、が表現されていたように思います。特に、近代以前の女たちの身体的不自由さが過酷であること、現代の女たちには安住の地がなく常に駆り立てられている不安など、不可視で不可思議な不条理が大きく影を落としているようです。

飯名尚人

おそらく、駒姫の存在が強くアピールしているからでしょう。つまり、関白秀次に側室にと望まれ、山形から京に到着したばかりで、現実には秀次の側室になってもいないのに、謀反の疑いで秀次一族郎党の処刑時に同じく処刑されたというエピソード。中西さんの新鮮な語り口とあいまって、逃げられない女が強烈です。不条理に命が翻弄されていく・・・。

寺田みさこさんの手に数本の細いタバコがはさまれ、時間とともに落ちて行く。大事なものであるはずなのに、男との間に位置するものなのに、煙の自由さを持つものなのに、それが次々と手から滑り落ちて行く。守りきれない自分の手の中の大事なものたち。これも、無情な時間という不条理なのだと思います。

障子に映る映像が格子に区切られていることで、空間全体が統合されずに、断片的夢想的に見えます。寺田さんの姿も、障子の間に見えては消える。大きな月面や日本画もキノコも金魚も記憶の残滓のようです。動く、隠れる、見えない、見える、条理に縛られた身体と不条理な心たち。そのはざまで女たちたちは諦念や悲しい怒りを抱え込んでいるのでしょうか。

「薊の会」と熊野古道で考えた芸の「道」

高橋　幸治

九月二日（日）、鶴咏さんこと鶴間さんの軽井沢の別荘（！）にて開催された「第八回 薊の会」に参加させていただいた。これまでも何度かお誘いいただいたことがあるのだが、毎回どうしても予定が合わず、今回、ようやく念願叶っての初参加となった。しかもプログラムの第一部が「美紗の会の仲間たち」ということで、ただのんびりビールでも飲みながら布咏師匠の演奏を楽しんでいればいいというわけではなく、お客様の前で唄と三味線も披露しなければならないという重責付きである。

もちろん第二部の師匠がメインであることは言うまでもないのだが、仮にも「咏治」というお名前をいただいている以上、あまり恥ずかしいものをお見せするわけにもいかないだろうということで、七月八月の稽古では秋のお浚い会の演目と並行して「薊の会」での唄と三味線のご指導もいただいた。おまけに布咏師匠と鶴間さんからの「そうそう、ついでに自分の演目の映像も作ってきてね」という指令にもうっかり「はい」と頷いてしまい、稽古もしなければならないは、映像も作らなければならないはで、直前は結構な重圧のかかる日々であった。

さて、当日である。第一部の参加者は佳咏さんこと照沼さん、幸咏さんこと山中さん、草咏さんこと縄岡さん、秋咏さんこと相馬さん、俊咏さんこと福岡さん、美紗の会の宴会部長となりつつある斎藤さん、もちろん、会主の鶴間さんも演者の一人である。相馬さんの三味線の糸が演奏開始直後に突然切れるというトラブルがあった以外は皆さんつつがなく演奏を終え、映像のほうもおおむねご好評をいただき、ひとまず「美紗の会の仲間たち」は肩の荷を下ろしたのであった。あとは創作中心の師匠の演目を堪能し、最後にご用意していただいた豪華な料理で宴会へと続いた。

宴会の際のスピーチでもしゃべらせていただいたのだが、やはり日頃の稽古もさることながら、人前で演奏するというのは本当に貴重な経験である。稽古では出来ても本番で出来なければ、結局、それは「身に付いていない」ということだし、お浚い会の前によく「仕上げ」ということを言うけれども、本番で失敗するということは実は「仕上がっていな

かった」ということなのだと毎回思う。お浚い会以外にこうした「気付き」の機会を与えてくださった師匠と鶴間さんには感謝である。

そんなことを考えながら「剏の会」の一週間後、高野山から熊野三社と呼ばれる本宮大社、速玉大社、那智大社を巡ってきた。ご存知の通り、近畿地方のさまざまな地域とこの熊野三社を結ぶ巡礼のためのルートが世界遺産にも登録されている「熊野古道」である。高野山から南下し熊野本宮へ向かう経路は「小辺路」、京阪方面から紀伊半島の西海岸沿いを下るルートは「紀伊路」、紀伊田辺から海岸沿いをぐるっと那智大社まで大回りにたどる道は「大辺路」、紀伊田辺から内陸を東に横切って本宮大社にまで至るコースは「中辺路」という。ほかにも、金峰山寺など山岳修験の聖地である吉野から道なき道を通って本宮大社にまで伸びる「大峰奥駈道」、伊勢神宮から紀伊半島の東海岸を南下して速玉大社に向かう「伊勢路」と呼ばれるルートもある。

旅の途中、芸の「道」というのはどこか熊野古道と似ているなと思った。かつて熊野古道を通って熊野三社を目指した人々にとって、本宮や速玉、那智に到着するという「結果」(result) よりも、峻険な山を越え、急流を渡り、風雨に晒されながら歩く数日間の「過程」(process) のほうが実は重要だったのではないか？　合理主義の現代に生きるわれわれはついつい「結果」を追い求めてしまい、すぐに「ゴール」などというものを設定したがるが、「結果」というのは考えようによっては次の「過程」につながるひとつの地点に過ぎないわけで、極端な話、「結果」などというものは永遠になく、すべては「過程」の連続でしかないのかもしれない。

人前で演奏するということは稽古の「結果」ではなく、いまの自分がどれほどの「過程」にいるのかを、いやがうえにも自覚しなければならない場であり、いやがうえにもお客様から見透かされてしまう場なのだろう。稽古という精進の「過程」は永遠に続く。「剏の会」を終えた直後に熊野古道を訪れながら、芸の「道」は「結果」のない、「過程」にこそすべてが宿る「道」なのだろうということをつらつらと考えた。さて、次の「美紗の会」までに、私自身、どれくらいの「過程」を積み重ねることができるだろうか？

杉原伸一

《平成三十年予定》

◎三月十七日（土）十二時半
高輪和霞館 宴会場
第五十五回 美紗の会のつどい
三十五周年記念演奏会

◎四月二十二日（日）
神田明神 本殿
名取り式

◎五月二十七日（日）
那須高原 ギャラリーバーン
ゲスト出演

■たより 第86号
発行者 美紗の会
編集責任者 照沼 太佳子
デザイン 近藤 幹則

■美紗の会
主宰 西松 布咏
稽古場 港区白金台三-二-二
白金台プレイス三階
電話 (三四四一) 一七二六
(五四四七) 一四一二
E_mail：nfue@soleil.ocn.ne.jp
URL:http://www.misanokai.com/